

【翻訳注解】

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第十三章～第十四章*

堀 智 弘

第十三章 奴隷の人生の浮沈

老主人の息子リチャードの死、それにすぐ続く老主人の死、奴隷を含む全財産の査定と分配、値踏みされ新たな所有者に分与されるためにヒルズボロに行くことが必要となる。悲しい展望と悲嘆。別れ、自分の運命を決定できない奴隷たちの完全な無力さ。主人アンドリューに対する漠然とした恐れ、彼の非道さと無慈悲さ。ルクリーシアさんが新たな所有者、ボルチモアに戻る。主人ヒューの家での喜び。ルクリーシア夫人の死。わが哀れな老祖母。彼女の悲しき運命。森の中の孤独な寝台。主人トマス・オールドの再婚。主人ヒューの家から再び離される。この変化を嘆く理由。逃亡計画を抱く。

* 本稿はJSPS科研費JP21K00384による研究成果の一部である。

ここで読者に、わたしのつまらない物語を時間的に多少さかのぼって、奴隷制に関してわたしが経験することになったもうひとつの出来事に注目することをお願いしなくてはならない。その出来事は間違いなく、奴隷制へのわたしの恐怖を深め、奴隷制度を實質的に支持する人々や方策に対するわたしの敵意を増すことに一役買ってきた。

ロイド大佐の農園から離されて以降、わたしは形式的には主人ヒューの奴隷であったが、実際には、そして法的にはわが老主人であるアンソニー船長の奴隷であったことについてはもうすでに述べた。よろしい。

ボルチモアに行つてまもなく、老主人の一番下の息子リチャードが亡くなった。そしてこの死の三年半後、わが老主人自身も亡くなり、残された彼の息子アンドリューと娘ルクリーシアだけが

その財産を分け合うことになった¹。老人が死んだのは、ヒルズボロにいた娘を訪問中、オールド船長とルクリーシア夫人の住居にいたときであった。オールド船長はロイド大佐のスループ船の指揮から退き、この町で店を経営していた。

このように突如この世を去ったため、アンソニー船長は遺言状を残しておらず、彼の財産はその二人の子であるアンドリューとルクリーシアのあいだで平等に分けられなければならなかった²。争い合う相続人たちのあいだでの奴隷の査定と分配は、奴隷の生活における重要な出来事である。相続人たちの性格と傾向は、分配されることになっている当の奴隷たちのあいだでたいいよく理解されており、どの奴隷も自分なりの好き嫌いをもっていた。しかし奴隷たちの好き嫌いはなんら役に立たなかった。

老主人が死亡すると、わたしも他の財産と一緒に査定され、分配されるために、すぐにお迎えが送られてきた。個人的には、わたしの心配はおもに、主人ヒューの家から引き離されるかもしれないということについてであった。この家は、祖母の家の次に、わたしにとって最も愛着のある場所だったのだ。しかしこの出来事すべてが、奴隷制の特徴として、わたしに衝撃を与えた。それ

1 アーロン・アンソニーは一八二六年十一月十四日に亡くなった。第四章の注ですでに述べたとおり、その息子リチャードがその前に死んだというのはダグラスの記憶違いであり、財産分与の際にはリチャードはまだ生きていた。

2 実際には、アーロン・アンソニーの財産は、その二人の息子リチャードとアンドリュー、および娘ルクリーシアの夫であったトマス・オールドの三人のあいだで分けられた。アンソニーが所有していたダグラスを含む二十八名の奴隷の総評価額は二千八百五十ドルであった(購買力による換算では、二〇二〇年時点の価値で七万五千ドルほどになる)。分配は一八二七年九月二十七日付で合意され、ダグラスはトマス・オールドが相続する奴隷のひとりとなった。

は、わたしを服従させている不自然な力について新たな洞察を提示してくれた。奴隷制に対するわたしの嫌悪はすでに相当なものであったが、その非道さについての認識をこのように新たにしたこと、嫌悪はさらに強まった。

値踏みされ分配されるために、わたしが東岸に出発したこの日は、わたしにとって悲しい日であり、トミーちゃんにとつて悲しい日であり、ボルチモアのわが愛しき女主人兼教師にとつても悲しい日であった。この日、わたしたち三人はみなひどく泣いた。というのも、永遠の別れとなるかもしれず、永遠の別れとなることを危惧していたからだ。わたしがどの奴隷資産の山に投げ分けられるのか、わかる者はだれもいなかった。わたしはこのように早くに、奴隷制が人間の通常の運命にもたらす、あの痛ましい不確かさの一端を味わったのだ。病氣や逆境や死は、すべての人の計画や目的に割り入ってくるだろう。しかし奴隷には、家庭が変わり、持ち主が変わり、別離を強いられるという、他の人々が知ることのない追加の危険がある。このときもまた、輪をかけて悲惨な光景が繰り広げられた。なんという一団だろうか！男も女も、若者も老人も、既婚者も独身者も、道徳的で知性ある存在が、一挙に馬や羊や牛や豚と同等にされてしまうのだ！馬と男——牛と女——豚と子供——みな、社会的存在の尺度では同じ部類となり、金と銀での換算額——奴隷所有者が奴隷に対して適用する唯一の価値基準——を確認するために同じ仔細な精査を受けるのだ！そのとき、いかに鮮やかに、奴隷制の野蛮きわまる力がわたしの前に浮かび上がったことか！個性は財産というさもししい考えに飲み込まれてしまうのだ！人間性が奴隷資産性のなかで失

われてしまうのだ！

査定のためには、分配が行われた。それは、激しい興奮と悲痛な不安の一時間であった。わたしたちの運命がいまや生涯にわたって決定されようとしていたが、この問題が決定されるにあたって、わたしたちは、干し草の山を食む雄牛や雌牛たちと同然に口を挟むことはできなかった。どんな願望や祈りがあるかと、査定人の一言で、すべての友情や愛情の絆を断ち切り、夫と妻、親と子を引き離すのにさえ十分であった。わたしたちはみな、人間の視点からすると、一瞬にしてわたしたちに恩恵や絶望を授けることのできるこの力の前で恐れ慄いていた。別離は大多数の奴隷にとって最も苦痛であったが、わたしたちはみな、その恐れに加えて、主人アンドリュウの手に落ちるといふ考えに対して紛れもない恐怖を抱いていた。彼は残忍さと大酒飲みで知られていた。奴隷は一般に、大酒飲みの所有者の手に落ちることを恐れる。主人アンドリュウは常習的な飲んだくれであり、その分別のない放縦さと際限ない暴飲ゆえに、老主人の財産の大部分をすでに浪費していた。なので、彼の手に落ちることは、深南部に売り払われる事態への第一歩にすぎないとみなされていた。彼は数年で自分の財産を使い果たし、彼の農場と奴隷は競売で売られることになるだろう、そうならたらかんかん照りの南部の綿花畑や米作の湿地に送りこまれることになるだろうとわたしたちは考えていた。これは深刻な不安の種となっていた。

北部の人々、それに自由な人々は一般的に、自分が生まれ育った場所に対して、奴隷が感じるほどの愛着はもっていないとわたしは思う。前者の場合、好きなようにどこにでも移動する自由が

あるため、ある特定の場所に過剰な愛着を抱くことが妨げられる。対して、奴隷は定着物であつて、選択権も目標も目的地もなく、あるひとつの場所に固定されているので、そこに根を下ろさなくてはならない、さもなくばどこにも根を下ろさないかである。どこか別の場所に移されるという考えは、たいてい脅しのかたちをとり、犯罪を処罰するために持ち出される。したがってそれは恐怖と怖れを伴っている。奴隷は売り払われることによって境遇が改善されると思うことはめったにないので、自分の生まれた場所からの別離を考えると、若い自由市民が遙か西部での生活や、彼が富と名声を手にしようとくろんでいるどこか遠い国での生活に思いをめぐらすときに彼の胸を踊らすような興奮はまったくない。離れていく奴隷が後にする人々も、ある去っていく者がその生まれた場所から離れることがこの人のためになると感じられるときには、友人や親類がお互いをあきらめあう際のあの陽気さをもって、離れていく者をあきらめることができない。こうした場合には、手紙のやりとりができるし、少なくとも再会が可能なので、再会の望みがある。だが奴隷の場合には、こうした軽減事由がすべて欠けている。彼の境遇が改善することは見込みがない——手紙のやりとりは可能でない——再会は無理である。奴隷が外界へ出ることは、生きている人が墓へ入っていく、見開いた両目で、妻や子供や親族同然の友人たちから見えないところ自分自身が埋められる様子を見るのに似ている。

自分たちの状況の見込みや可能性に思いをめぐらすことで、わたしはおそらく仲間の使用人たちの大多数よりも苦しみを味わっていた。わたしは繊細とさえいえるほど親切な扱いを受けるとは

どういふものか知っていたが、彼らはそのようなものを一切知らなかった。彼らにとつて人生とは、手荒で苦しく、また暗いものであった。彼ら——その大多数——はタツカホーにあるわが老主人の農園で生活を送ってきていて、プラマー氏の支配の影響力を感じたことのある者たちであつた。この監督は、ほとんどの奴隷の背中の生命ある羊皮紙に彼の性格を書き込み、彼らの背中を硬化させたのだが、わたしの背中（農園からボルチモアへ早くに移されたために）まだ柔らかかつた。わたしは、自分にとつて母親同然である親切な女主人をボルチモアに残してきていた。別れに際して彼女は涙を流してくれて、彼女に再会する見込みは不確実でしかなかつたので、警戒と苦悶なしにそうした見込みに思いを巡らすことはできなかった。あの親切な女主人の元から永遠に去り、もっと悪いことに、アンドリュー・アンソニー——財産の分配のわずか数日前に、わたしがいる前でわが兄ペリーの喉元をつかみ、地面に押し倒し、兄の鼻と耳から血が流れるまで、ブーツの踵で兄の頭を踏みつけた人物——の奴隷になるといふ考えは恐ろしかつた！この極悪非道な行いには、主人アンドリューがなんらかの些細な用事でペリーを必要としているときに、兄が遊びに行つていたという事実以上の申しわけはなかつた。この非道行為はまた、彼の全般的な性格と符合していた。彼は兄に激しい殴打を加えたあと、わたしがひどく驚いた様子で彼を見ていることに気づき、「こ、こ、うだ、いつかお前もこうしてくれるぞ」と言つた——いつかというのは、わたしが彼の所有となつたときという意味なのは間違ひなかつた。この脅しがわたしの感情にとつてあまり平穩をもたらすものではないことを読者はわかつてくれるだらう。

う。彼がほんとうにわたしに手をかけたがっていることは見てとれた。だがわたしがそこにいたのは数日にすぎなかつた。わたしは命令を受けておらず、命令に背くこともなかつたので、わたしを鞭打つための口実はなかつた。

ついに、不安と緊張に終わりが訪れた。そしてそれは、情け深い神のおかげで、わたしの望みに沿つた終わり方であつた。わたしはルクリーシア夫人——残酷なケイティおばさんが悪意に満ちた嘲罵でわたしの苦しみを増長させていたときに、わたしの頭に布を巻いてくれたあの愛しき婦人——の相続分と決まつたのだ。

トマス・オールド船長とルクリーシア夫人はすぐさま、わたしをボルチモアに戻すことにした。ヒュー・オールド夫人がどれだけ心底から温かくわたしに愛情を抱いているか、またわたしが戻つてくることでヒュー氏の息子がどれだけ喜ぶか、ふたりはわかつていたのだ。それに、当面のところ、これほど年若い者がやるべき仕事もなかつたので、ふたりは快くわたしをボルチモアに送り出した。

ボルチモアに戻ることができてわたしがどんなに喜んだか、またトミーちゃんがどんなに喜んだか、ここで詳述する必要はない。彼の母親が涙を流してどんなに喜んだか、主人ヒューが明らかに満足した様子であつたことについても同様である。この問題が決定されるまでわたしがボルチモアを離れていたのは一ヶ月にすぎないが、その期間はまるまる六ヶ月にも思えた。

ひとつの困難が去ると、別の困難がやつてくる。奴隷の生活は不確実さで満ち満ちている。わたしがボルチモアに戻つてほどなくして、わたしの敬慕の念の対象としてはヒュー・オールド夫人

にすぐ次ぐ、わが親切な友人であるルクリーシア夫人が、夫と子供ひとり——アマンダという名前の娘——だけを残して亡くなったという知らせがもたらされた³。

奇妙なことに、ルクリーシア夫人の死からまもなく、主人アンドリユーが妻と子供ひとりを残して亡くなった。かくして、アンソニー家の全員が一掃されてしまい、残されたのは子供ふたりだけであった。こうしたことは、わたしがロイド大佐の農園を離れてから五年のあいだにすべて起こった。

こうした死去の結果として奴隷たちの境遇に変化がもたらされることはなかったが、友人であるルクリーシア夫人の死後、彼女が生きていたころほどにはどうしても安心を感じなくなった。彼女が生きていたあいだは、非常事態になっても、わたしのために抗弁してくれる強力な友人がいると感じていた。十年前には、いま述べた出来事後のわが家族の状況について、このように説明していた。

「そこで、わが老主人の全財産は、奴隷も含めて、見知らぬ人々——この財産の蓄積にはなんら関わっていない見知らぬ人々——の手に渡った。自由を与えられた奴隷はひとりとしていなかった。最も年少の者から最も年長の者まで、全員が奴隷にとど

3 アリアナ・アマンダ・オールド（一八二六—一八七八年）が生まれてまもなく（同年）、母ルクリーシアが死亡し、さらにその後、父トマスが再婚したために、彼女は義母であるロウイーナ・ハンブルトン・オールドに育てられた。一八四三年にフィラデルフィアの石炭商であるジョン・L・シアーズと結婚し、四人の子供をもうけた。ダグラスは、本自伝の出版後の一八五九年にフィラデルフィアで演説を行った際に彼女を訪問し、その後も彼女が亡くなるまで交友を続けた。

まった。奴隷制の極悪非道な性質についてわたしの確信を深め、わたしの心が奴隷所有者たちへの言いようのない嫌悪で満たされるうえで、わたしの経験のうちでなによりも寄与したものがあつたとすれば、それはわが哀れな年老いた祖母への彼らのひどい忘恩ぶりであつた。祖母は若い頃から老年に至るまで、わが老主人に忠実に仕えてきた。彼女は彼のすべての富の源泉であり、彼の農園を奴隷たちで満たし、彼に仕えるなかで高祖母となった。彼女は幼児期の彼をあやし、子供時代の彼の世話をし、彼の生涯にわたって仕え、彼の死に際しては、彼の冷え切った額から冷たい臨終の汗を拭き取って、彼の両目を永遠に閉じてあげたのだ。それにもかかわらず、彼女は奴隷のまま——生涯にわたって奴隷のまま——見知らぬ人々の手に委ねられたのであつた。そして、見知らぬ人々の手に渡った彼女は、自分の子供たちや孫たちや曾孫たちがたくさん羊のように離れ離れにされるのを、彼らや自分自身がどうなるのかについて一言教えてもらうという些細な特権さえ与えられずに目のあたりにしたのであつた。そして、奴隷所有者たちのひどい忘恩ぶりや鬼畜のごとく無慈悲さがここに極まるのが、祖父母はもう非常に高齢で、わが老主人や彼の子供たちの誰よりも長生きし、全員の生まれと終わりを見届けるほどであつたが、その体はすでに老齢の痛みと苦しめられており、かつては活動的であつた四肢に完全な無力さが急速に忍び寄ってきているために、祖母の現在の所有者たちが彼女をほとんど価値がないと見限ったことだ。彼らは祖母を森へと連れて行き、小さな小屋を建て、小さな土煙突を作っては、そこで完全にひとりぼっちで自足の生活を送るという特権を彼女に受け入れさせることで、

実質上、彼女を放り出して死ぬに任せたのであった！わが哀れな年老いた祖母がもしいまでも生きていたら、まったくの孤独に苦しんで生きているのであり、いなくなった子供たち、いなくなった孫たち、いなくなった曾孫たちを思い出し、それを嘆きながら生きているのだ。奴隷のための詩人であるホイットティアの言葉を借りれば、子供たち孫たちは――

『行った、行った、売られて行った

はじめじめ寂しい米作湿地へ

奴隷用の鞭がたえまなく振られる場所へ

うるさい虫に悩まされる場所へ

熱病の悪魔がしたたる滴で

毒をまきちらす場所へ

くらくらさせる太陽の光が

暑い霧がかった大気にぎらぎらする場所へ――

行った、行った、売られて行った

はじめじめ寂しい米作湿地へ

ヴァージニアの丘や水辺から――

ああ悲しいかな、わが盗奪されし娘たちよ！⁴

4 アメリカの詩人ジョン・グリーンリーフ・ホイットティア（一八〇七―一八九二年）は、奴隷制廃止運動家のウィリアム・ロイド・ギャリソンと若い頃からの親しい友人であり、ギャリソンとともに一八三三年のアメリカ反奴隷制協会の設立にもかかわり、以後三十年間にわたって数多くの反奴隷制の詩を書いた。ここに引用されているのは、彼の「南部奴隷制に売られた娘に宛てたヴァージニアの母奴隷の別れの言葉」（一八三八年）の第一連である。

炉端には人気がない。子供たち、事情もわからずかつて彼女の前で歌い踊っていた子供たちはいなくなった。彼女は老齢の暗闇のなかで、水を一飲みしようと手探りする。彼女が自分の子供たちの声のかわりに昼に聞くのは鳩のうなり声であり、夜に聞くのはぞつとさせるフクロウの金切り声である。すべては闇である。墓はすぐそこである。そしていま、老齢による苦痛と痛みに圧迫されるとき、頭が足までかがむとき、人間存在の始まりと終わりが合い、無力な幼年と苦痛な老年がひとつになるとき――このとき、この最も助けが必要なとき、衰えつつある親に対して子供たちだけが發揮することができるあの優しさと愛情を發揮すべきとき――わが哀れな年老いた祖母、十二人の子供の献身的な母親は、彼方の小さな小屋に、わずかなほの暗い残り火の前に、まったくのひとりきりでとりのこされているのだ。⁵

ルクリーシア夫人の死の二年後、主人トマスが二人目の妻と結婚した。彼女の名前はロウィーナ・ハミルトン、わが主人が当時、住居を構えていたセント・マイケルズから五マイルほど離れたところに住んでいた、メリーランド東岸の富裕な奴隷所有者ウィリアム・ハミルトンの長女であった。⁶

結婚からまもなくして、主人トマスは主人ヒューと仲違いし、

5 ダグラスの一八四五年の第一自伝の第八章からの自己引用。

6 ロウィーナ・ハンプルトン（一八一二―一八四二年）は、トールボット郡マーティンゲハムの裕福な奴隷所有者ウィリアム・ハンプルトンの長女で、一八二九年五月にトマス・オールドと結婚した。

弟を罰するために、わたしを家に戻すように弟に命じた。この仲違いの理由が、南部の騎士道精神と人間性の特性を示すのに役立つので、それを述べよう。

わたしのミリーおばさんの子供のひとりに、ヘニーという名前の娘がいた⁷。ヘニーはごく小さいところに転んで火に突っ込んでしまい、両手をひどく火傷したので、両手がほとんど使えなかった。指が手のひらにほとんどくっついてしまっていたのだ。なにかをやっている素振りをすることはできたが、所有するにほとんど値しない——脚を折ってしまった馬同然に無価値——と考えられていた。このぶかっこうで醜く役立たずの人間資産品を、オールド船長はボルチモアへ送りつけ、弟である主人ヒューが彼女の仕事を受け入れるようにさせたのだった。

主人ヒューと彼の妻は、哀れなヘニーを公正に試用してみて、体の不自由な召使いには使い途がないという結論に達し、主人トマスのもとに彼女を送り返した。後者はこのことを弟による忘恩の行いだととらえ、自分の不満を示すために、もしおまえが「雌鶏」を飼えないのなら、「フレッド」を置いておかせないと言って、わたしをセント・マイケルズにすぐに送るように要求したのだ。

ここに、わたしの神経へのさらなる衝撃、わたしの計画のさらなる破綻、わたしの宗教的社会的連帯のさらなる断絶が到来した。このころにはわたしは大きな少年となっていた。何名もの黒人の若者がわたしを先生扱いしてくれて、わたしは彼らにとって

7 第五章すでに言及されているヘニー・ベイリーのこと。

多分に有用な存在となっていた。彼らの数名に文字の読み方を教えたことがあり、彼らと一緒に余暇の時間の多くを過ごすことが習慣となっていた。わたしたちのあいだの愛着は強く、わたしは別れを非常に恐れた。しかし落胆は、特に奴隷においては無益である。わたしは奴隷にすぎず、わたしの望みは無意味で、わたしの幸福はわが主人たちの意のままであった。

ボルチモアを去るにあたってのわたしの落胆は、査定されて正しい所有者に引き渡されるために、以前この都市を離れたときと同じ理由によるものではなかった。わが家庭は以前のような快適な場所ではもはやなかった。主人ヒューとかつては敬虔で愛情深かったその妻の両方に、変化が起こっていた。彼の場合にはブランドーと悪い仲間が、彼女の場合は奴隷制と社会的孤立が、両者の性格に壊滅的な影響を及ぼしていた。トマスはもはや「トミーちゃん」ではなく大きな少年であり、彼の階級が醸す雰囲気わたしに対してみせるようになっていた。したがって、主人ヒューの家でのわたしの状況は、以前ほど居心地のよいものではまったくなくなっていた。いまやわたしの愛着は家の外にあった。わたしが愛着を感じていたのは、わたしが教育を分け与えた者たちに対してであり、わたしに教育を与えてくれたあの小さな白人の少年たちに対してであった。加えて、わが親愛なる老父、キリスト教的な恩寵において「アンクル」・トムのまさに生写しである敬虔なローソンもいた⁸。この類似は非常に完全であったので、彼

8 次の文でも示唆されているように、ハリエット・ビーチャー・ストウの反奴隷制小説『アンクル・トムの小屋』（一八五二年）に登場する謙遜で信心深い奴隷アンクル・トムを引き合いに出している。

こそがストウ夫人のキリスト教的英雄のモデルであつたのかもしれない。こうした親愛なる友人たちのもとを離れることを考える大きな苦悶を感じた。再びボルチモアに戻る望みもなく旅立とうとしていたからである。主人ヒューとその弟との反目は激しくて和解の余地がない、あるいは少なくともそのように思えたのだ。

永遠の（と思えた）別離となる友人たちへの想いに加えて、逃してしまった逃走の機会について、わたしはくよくよと悲嘆した。逃亡を先延ばしにしてきたことで、逃げる機会がボルチモアのような大都市よりもはるかに少ない場所に置かれることになつてしまったのだ。

ボルチモアからセント・マイケルズに向かう途中、わたしたちのスループ船——アマンダ号——がチェサピーク湾を南下していると、この都市とフィラデルフィアを行き来するいくつもの蒸気船に追い抜かされたので、わたしはそれらの蒸気船の航路をよく観察した。そして、船がセント・マイケルズに方向を向けて航行しているときに、わたしは奴隷制から逃亡する計画を立てた。この計画およびそれに関連した事柄については、親愛なる読者はあとでもっと知ることになるだろう。

第十四章 セント・マイケルズでの経験

村々その住民たちへ彼らの仕事と卑しい習慣へトマス・オールド船長へ彼の性格へ彼の二人目の妻ロウィーナへお似合いへ飢えの苦しみへ食料を盗む必要へこれを擁護する議論へ自由な社会の道徳規範は奴隷の社会にはあてはめることができないへ南部の野外集会へ主人トマスがそこでやったことへ希望へ彼の回心への疑いへその結果へ信仰と行いの完全なる不一致へ教会での彼の昇進と前進へメソジスト派の説教師たちへわたしたちに対する彼らの軽視へひとつの素晴らしい例外へジョージ・クックマン導師へ日曜学校へいかに、だれによって邪魔されたかへわが将来に落ちる暗い影へ哀れないとこ「ヘニー」へ主人の彼女への扱いへ奴隷調教師コヴィイ⁹

わたしの新たな家庭のある村セント・マイケルズは、奴隷州の村々に比べれば、おおむねまともであった。そこには居心地のよい住居がわずかにあったが、全体として活気がなく怠惰で娯楽に欠いた様子であった。大部分の建物は木造で、塗料による人工的な装飾を施されたことは一度もなく、時間と風雨によって木材の明るい色合いは剥げ落ち、火災で黒焦げになった建物とほとんど同じくらい黒くなっていた。

セント・マイケルズはかつて（一八三三年以前、わたしがそこに住み始めたのがこの年なので）造船業の地域として多少の評判を得て出でくる話題の順番にあわせて、列挙されている話題の順序を原文から多少変更している。

を享受していたが、この産業はほぼ完全に、ボルチモアやフィラデルフィアの市場向けのカキ漁に取って変わられていた——これは道徳や勤勉さや生活様式にとって非常に悪影響のある成り行きであった。マイルズ河は幅広く、そのカキ漁場は広大なので、秋と冬と春のあいだ、漁師たちは昼じゅうずっと、それに夜間の一部にも漁にでていた。こうした野外での作業は、寒さから身を守るための最もよい手段だとその当時は思われていたアルコール飲料を大量に携行する口実となった。それぞれの小舟にはラム酒の入った水差しが備え付けられていて、セント・マイケルズのこの階級の市民たちにとっては、酒をちびちび飲むことが一般的になっていた。この飲酒習慣は無知な人々のあいだに粗暴さや粗野さ、地域の社会的改善への怠慢な無関心を助長していたので、わたしがそこに赴いて住み始める以前に、セント・マイケルズは見事に耐えない場所であると同時に、とても神が見るに耐えない場所になってしまっていたと、そこに残っていた数少ない思慮のある人々が認めていた。

わたしがボルチモアからセント・マイケルズに発ったのは、一八三三年の三月のことであった。この年がわかるのは、ボルチモアで最初のコレラの翌年だったからであり、天が星々の随行団によってほとんど分かれんばかりとなるあの奇妙な現象の起きた年でもあったからである¹⁰。わたしはこの荘厳な光景を目撃して畏怖の念に打たれた。大気は空から明るく降り注ぐ伝令たちで満た

10 ボルチモアで最初の広範なコレラ流行は一八三二年の夏に起きた。しし座流星群は毎年見ることができ、一八三三年十一月十三日に北アメリカの各地で最大規模の出現がみられた。

されているようにみえた。わたしはこの崇高な光景を見たとき、これは人の子イエスの再臨の先触れかもしれないと、その瞬間に思わないではいられなかった。そして、この当時のわたしの心理状態では、彼をわが友人かつ救世主として歓迎する覚悟ができていた。「星は空から落ちるだろう」と以前に読んだことがあったが、いま現に星たちは落ちていたのだ¹¹。わたしは心中では非常に苦しんでいた。わたしの愛情の若い巻きつるがなにかに巻きつきたびに、自然に反するなんらかの外部の力によって乱暴に引き剥がされていたので、この世では与えられない休息を天国に求め始めていた。

しかし物語を続けよう。ロイド大佐の農園で、わが老主人の家庭に加わっていた主人トマス・オールドとともに生活していたころから七年以上経っていた。わたしたちはほぼ完全に他人同士であった。というのも、わたしが老主人の家で彼を知っていたころには、主人としてではなく、たんに老主人の娘と結婚した「オールド船長」として知っていたにすぎないからだ。彼の気性や性格、それに彼を喜ばす最もよい方法についてのレッスンは、すべてこれから学ばなければならなかった。しかし奴隷所有者たちが奴隷に近づくさいにはさほど格式張ることはなかったので、この主人という新たな学習素材についてのわたしの無知は一時的にすぎなかった。新たな女主人も彼女の意地悪さを知らしめるのに長くはかからなかった。わたしは「ルクリーシアさん」の面影がまだ忘れられず、当時は義母の管理下で生活していた彼女の娘、小

さなアマンダの顔に彼女の面影が輝くのを見ていたために、ますます忘れられなかったのだが、新たな女主人は彼女のような人ではなかった。エイベルの息子のアイクによってわたしの頭に作られた裂傷に、優しき心に導かれて、癒しのバルサムの布を巻いてくれた柔らかな手をわたしは忘れてはいなかった。トマスとロウィーナは実にお似合いのふたりであることがわかった。夫はけちであり、妻は無慈悲であった。そして——このような場合にはごく自然にあることだが——彼女は夫を自分自身と同じくらい無慈悲にすることができた。一方で、夫のさもしさと同水準まで容易に墮落することができた。主人トマスの家で、わたしは——実に七年ぶりに——飢えの苦しみを思い知らされ、これは楽に耐えられるものではなかった。

というのも、主人ヒューの家庭の諸々の変化にもかかわらず、わたしに食料を与えるさいの気前のよさには変化がなかったからである。奴隷に十分な食べ物を与えないのは非常にさもしきことであり、メリーランドの奴隷所有者たちのあいだで一般にそのように認識されている。原則は、どんなに粗末だとしても、食料は十分に準備すべきということである。これが原理であって——メリーランドのわたしの出身地域では——一般的な慣わしがこの原理に一致している。ロイドの農園は例外であり、主人トマス・オールドの家も同様であった。

ひき割りトウモロコシ粉が食料品としては腹にたまらないのは周知のことであり、次のような事実から、主人トマスのけちさについてわたしが述べたことが正しいかどうか、だれでも簡単に判断できる。台所棟には四名の奴隷がいて、屋敷には四名の白人

——トマス・オールド、オールド夫人、ハダウェイ・オールド（トマス・オールドの弟）、そして小さなアマンダ——がいた¹²。

台所棟の奴隷たちの名前は、わたしの姉イライザ、おばプリシラ、いとこのヘニー、そしてわたしであった。この家には八名がいたのだ。毎週、粉挽場からは半ブッシェルのトウモロコシ粉が運ばれてきたが、台所棟のわたしたちにはそれ以外のものはほとんど与えられなかったので、食料はほぼトウモロコシ粉だけであつた。この半ブッシェルのトウモロコシ粉のうちから、屋敷の家族は毎朝、小さな一塊を消費していたので、台所のわたしたちには、ひとり当たり、毎週半ペックにも満たない量しか残されていなかった。これはロイド農園で支給されていた食料の半分以上であつた。これでは生存に十分ではないので、わたしたちは惨めにも、隣人たちの助けにすがって生きていかなくてはならないはめになった。物乞いするか、盗むかすることを強いられ、わたしたちはその両方をやった。盗みのようなことはすべて、わたしはそれ自体としては嫌っていたが、飢えているときには、どこでも食料があれば盗むことをためらわなかったと率直に告白する。また、この習慣はたんに思慮分別を欠いた本能の結果ではなかった。わたしの場合には、それは道徳的要求を明確に理解した結果であつた。この問題を仔細に検討し熟慮したのちにはじめて、そのような手段によって飢えを満たすことに及んだのだ。わたしの労働と身体は主人トマスの所有物であり、生きるための必需品

¹² ハッダウェイ・オールド（一八一三（没年不明）は、トマス・オールドの両親の八番目の息子。

——わたし自身の労働によって得られた必需品——を彼によって奪われていることを考慮すると、わたし自身のものをわたし自身に給する権利を導くのは容易であつた。それはたんに、わたし自身のものをわが主人の使用のために領有するにすぎない。というのも、そのような食料によって得られる健康や体力は、彼の役に立つように使われるからである。セント・マイケルズの説教壇から聞こえてくる法や教えに従えば、それはたしかに盗みであつた。しかし、わたしはまだ宗教への崇敬を保持していた一方で、こうした事柄に関しては、説教壇から降り聞こえてくることをすでにさほど重視しなくなりはじめていた。主人から盗むことがいつでも便宜に適うというわけではなかったし、わたしが主人から盗んでも罪ではないかもしれないということと同じ理由によつて、わたしが他の人たちから盗むことも正当化されるようには思えなかった。わが主人の場合には、それはたんに移転の問題であつた——彼の肉をひとつの桶から取つて、別の桶に入れても、この取引によつて肉の所有権は影響を受けない。はじめは、彼は肉を桶のなかに所有しているが、最後にはわたしのなかに所有したのだ。彼の肉貯蔵庫はいつでも開いているわけではなかった。その場所には嚴重な見張りが配置されていて、鍵はロウィーナのポケットのなかの大きな鍵束についていた。錠に守られた肉とパンがかびているときに、哀れなわたしたちが、飢えでひどく苦しんでいたことがどんなにたくさんあつたことか。そのあいだ、鍵はわが女主人のポケットのなかにあつたのだ。わたしたちが半分餓死しかかっていることを彼女は知っていたのに、こうだったのだ。それなのに、この女主人は聖人めいた様子で夫と一緒にひざ

まず、慈悲深い神が収穫と蓄えにおいて自分たちに恵みをもたらしてくれるように、そして最後には彼の王国において救済してくれるように毎朝祈っていたのだ。

他の人たちから盗む権利を確証することが必要であった。そしてそれは、わが主人から盗む権利を導き出すよりも広い一般原理にしか基づくことができなかった。

わたしがこの明確な権利にたどり着くには多少の時間がかかった。読者は、このことの簡単な説明によって、わたしの思考の流れをいくらか了解できるだろう。わたしはこう考えたのだ。「わたしは主人トマスの奴隷であるだけでなく、社会全体の奴隷である。社会全体は、形式上および事実上、主人トマスがわたしの当然の自由とわたしの労働への正当な報酬をわたしから奪う手助けをする責務を担ってきた。したがってわたしは、主人トマスに対してわたしが有するどんな権利も、わたしから自由を奪うために彼と共謀している者たちに対して同等に有する。社会がわたしのことを特権的な横領品だとしているのだから、自己保存の原則に基づけば、わたしが横領することも正当化される。それぞれの奴隷は全体のものだから、全体はそれぞれのものでなくてはならない。」

ここでわたしは、人を動揺させ、また別の人を憤慨させ、すべての人から不同意を買うような信仰告白をしよう。それはこうだ。奴隷は、彼の正当な稼ぎの範囲内であれば、彼の主人の金や銀および一番上等な衣装、あるいは他のすべての奴隷所有者がもつそれらを失敬しても完全に正当と認められるということ、そして、そのように取り去ることは、語のどんな正当な意味において

も盗みではないとわたしは考える。

自由な社会の道徳は、奴隷社会には適用できない。奴隷所有者たちは、神の法や人間の法が知るどんな犯罪も奴隷が犯すことをほとんど不可能にしまった。もし彼が盗んだとしても、それは自分自身のものを取っているのであり、彼が主人を殺したとしても、独立革命の英雄たちを模倣しているのだ。奴隷所有者たちは、この忌まわしい関係から生まれるすべての悪に対して個人的にも集団的にも責任があるとわたしは考える。そして審判では、公正な神の視点からそのように判断されるだろうとわたしは信じる。人間を奴隷にするとき、その人から道徳的責任を奪っているのだ。選択の自由がすべての責務の本質である。しかし親愛なる読者たちはおそらく、わたしの意見よりも、わたしの個人的経験にもっと密接に関係する事柄に関心があるのだろう。ただし、わたしの意見は、ある意味ではその経験によって形成されてきたのであるが。

奴隷所有者たちは悪であるが、当時のわたしの主人、トマス・オールド船長ほどに、尊敬の念を催させるすべての性質を完全に欠いている奴隷所有者にはめったに会ったことがない。

わたしは彼と同居しているとき、彼には高貴な行動ができないと考えていた。彼の性格の最大の特徴は極度の自分本位であった。彼は自分でもこのことに十分気づいていて、しばしば隠そうとしていたと思う。オールド船長は生まれつきの奴隷所有者ではなかった——生得権によって奴隷所有の少数独裁制の成員だったのではなかった。彼は結婚で得た権利によって奴隷所有者になったにすぎなかったのであり、すべての奴隷所有者のなかで、

後者は、ばぬけ、最も厄介であった。彼には支配欲、主人としての傲慢さ、權威のふりかざしのすべてがあつたが、彼の支配には一貫性という重要な要素が欠けていた。彼は無慈悲になりえたが、それを示す彼のやり方は臆病で、彼の勇氣よりも彼の下劣さを証拠立てていた。彼の命令は強かつたが、実行力は弱かつた。

どんなことになるうが恐れないような寛大で威勢のよい奴隷所有者の気持ちのこもつたあり方に、奴隷たちは氣づかないことはなかつた。そして彼らは、利益欲にのみ突き動かされて鞭を振るうような不機嫌で偏狭な人物よりも、このように豪胆で恐れしらずなタイプの主人を好む——無礼という理由で撃ち殺される危険があつてもである。

奴隷たちはまた、本来の奴隷所有者の生得權に基づく挙動と、偶然による奴隷所有者の見せかけの態度をすぐさま見分けるのであり、彼らはどちらも尊敬はしないが、間違いなく前者よりも後者を輕蔑する。

奴隷たちを自分に仕えさせるという贅沢は主人トマスにとって目新しいものであり、彼にはそうさせるための心構えができていなかった。彼は奴隷所有者であつたが、奴隷たちを所有したり管理したりする能力を欠いていた。わたしたちは彼のことを「ご主人さま」とはめつたに呼ばずに、たいてい彼の「湾船」での肩書き——「オールド船長」——で呼びかけた。そのようなふるまいが、彼をきこなくみせ、そして結果的に不機嫌にさせることに、おおいにつながつていた可能性は容易に了解される。彼の妻は特に、わたしたちに夫を「ご主人さま」と呼ばせることに熱心であつた。「お前のご主人さまは店にいるの？」——「お前のご主

人さまはどこ？」——「お前のご主人さまのところに行つて話さない」——「お前のふるまいを、ご主人さまに知らせてやるからね」——とよく彼女は言つていたが、わたしたちはできが悪い生徒であつた。特にわたしと姉イライザはこの点でできが悪かつた。プリシラおばさんは氣性的にイライザとわたしよりは頑固でも反抗的でもなかつたので、彼女の行く道はわたしたちの道より平坦だつたと思う。

一八三三年の八月、主人トマスの扱いを受けてわたしがほとんど自暴自棄になつてしまつていたころ、そして逃亡への度重なる決意をそれまで以上に強く抱いていたころ、わたしたち全員にとつて、より明るくよりよい日々を約束するように思える出来事が起きた。セント・マイケルズから八マイルほどのベイサイド（野外集會でよく知られる場所）で開かれたメソジスト派の野外集會で、主人トマスが宗教を信じると告白したのだ¹³。彼はながらく教会と牧師たちの関心の対象であつたのであり、それは牧師たちが繰り返し彼を訪問し、長々と説き勧めていたことからわかつた。お金と地位があつたので、彼は獲るに値する魚だつたのだ。セント・マイケルズの町では、彼は最上級の市民に等しかつた。彼は嚴格に禁酒を守つていて、それはひよつとすると信念に基づいていたのかもしれないが、損得勘定からと考えるのが妥当である。敬虔な見せかけを装つて教会の柱となるために彼がなす

13 建国期以来、トールボット郡のベイサイド（湾岸地域）はメソジスト派の野外集會が開かれる場所として知られていた。メソジスト派は他の宗派の施設の使用を許されなかつたため、しばしば野外で伝道集會を開いていた。

べきことはほとんどなかった。さて、野外集会は一週間続き、郡のあらゆる場所から人々が集まってきて、ボルチモアからも人々が二艘の蒸気船に乗ってやってきた。集会にふさわしい場所が選ばれ、椅子が並べられ、演壇が立てられた。説教師の演壇に向きあうかたちで粗末な祭壇が柵で囲まれ、そこには悔改者たちを収容するために藁が敷かれた。これは少なくとも百名を収容できるものであった。前方、説教師の演壇の両側、座席の長い列の外側には、最上級の堂々たるテント群が立ち上がっていて、それぞれのテントは強度、端正さ、収容できる人の数の点で互いに競い合っていた。この第一の環状のテント群のうしろには、それほど堂々としていない別のテント群があり、その円は集会の場所をぐるっと巡って話し手の演壇にまで到達していた。この第二級のテント群の外側には、ありとあらゆる形と大きさの有蓋の荷馬車や牛車や乗り物があつた。これらはその所有者たちにとってのテントの役目を果たしていた。これらの外側では、あらゆる方角で数々の巨大な火が燃えており、そこでは、この輪のなかで自分自身の精神的な福利厚生に精を出している人々のために、炙ったり煮たり揚げたりという作業が行われていた。説教師の演壇のうしろには、黒人が使用するための狭い空間が区画されていた。この階級の人々には座席は準備されておらず、仮に説教師が彼らに呼びかける場合には、「左向、こ、う、の」と呼びかけた。説教が終わったあと、礼拝ごとに、悔改者たちは囲いのなかに入ってくるよう招待された。それに牧師たちが出て行って男たち女たちに入るように説得する場合もあった。そうした牧師のひとりによって、主人トマス・オールドは囲いのなかに入るように説得された。わた

しはこのことにおおいに関心を抱き、事態を見守った。黒人は囲いになかに入ったり、説教師の演壇の前に行くことは許されていなかったのだが、わたしは黒人と白人のある種の中間地点に自分の場所を確保することを敢行した。そこからは悔改者たちの動き、特に主人トマスの進捗をはつきりと見る事ができた。

「もし彼が宗教を信じるようになったら、奴隷を解放するだろう。仮にそこまではやらないにしても、いずれにせよ、私たちに對してもっと優しく接するようになり、これまでよりは気前よく食料をくれるようになるだろう」とわたしは考えていた。わたし自身の宗教的経験に照らし合わせてみて、そしてわたし自身の場合に当てはまることに基づいてわが主人を判断すると、彼が宗教を信じると告白したあとにそのようなよい結果が起らなければ、彼が心の底から回心したとみなすことはできなかった。

しかしわたしの期待は二重に裏切られた。主人トマスはいまだに主人トマスだったのだ。彼の正しさの成果は、わたしが期待していたような仕方で結実することはなかった。彼の回心は人々に對する彼の関係を変えるものではなく——いづれにせよ、黒人に對する関係を変えるものではなく——神との関係のみに限定されていた。そもそもわたしの信用はさほど大きくなかったと告白しよう。彼の様子には、わたしの心のなかに彼の回心について疑いを投げかけるようななにかがあつたのだ。わたしが立っていた場所からは、彼のすべての動きを見ることができた。彼が囲いに留まっているあいだ、わたしは彼を仔細に観察した。彼の顔は極度に赤く、髪はぼさぼさだったにもかかわらず、そして彼のうめき声が聞こえてきて、あたかも「どっちに進むべきか？」と自問し

ているかのように、涙が一粒だけ彼の頬に浮かんでいるのを見たにもかかわらず——彼の回心の偽りのなさについては完全には信用することができなかった。この落涙のためらいがちなふるまいと一粒だけという点がわたしを苦しめ、それが一部を成している過程全体に疑いを投げかけた。しかし人々は「オールド船長がやったぞ」と言っており、わたしとしてはうまくいってくれるように望んだ。わたしも宗教を信じていて、このときせいぜい十六歳であつたが、まるまる三年教会に通っていたので、慈愛の精神からこうせざるをえなかったのだ。奴隷所有者はときとして、一部の自分の奴隷の敬虔さを信じることもあるかもしれないが、奴隷が自分の主人の敬虔さを信じることはめつたにない。「着物の裾にわたしたちの血がついているのだから、主人は天国に行けるはずがない」がすべての奴隷の信条において確立した要点であり、これとは逆のすべての教えに勝り、確固たる事実として永遠に有効なのだ¹⁴。奴隷所有者が神を受け入れたことを証立てるために奴隷に示しうる最高の証明は、彼の奴隷を解放することである。これが、彼が喜んですべてを神に、そして神のために差し出そうとしていることの証拠である。こうしないことは、わたしの考えでは、そしてすべての奴隷の意見では、煮え切らなさを証明であり、真の回心という考えと完全に矛盾する。わたしはまた、メソジスト派教会規律のどこかで、次のような質問と答えを読んでいた。

14 エレミア書23:4に基づく。

「質問、奴隷制の根絶のために何をなすべきか？
 答え、われわれはいままで同様、奴隷制の大悪について確信していると宣言する。したがって、どんな奴隷所有者もわれわれの教会で公式の職務に選ばれる資格を有しない。」¹⁵

こうした言葉は、長い間わたしの耳に鳴り響いていて、希望を抱くよう鼓舞してくれた。しかし、前に述べたとおり、わたしの期待は裏切られる定めであつた。主人トマスは、わたしが彼に対して抱いている希望や期待をわかっているようであつた。わたしの視線に应えて彼がわたしを見る様子から、「若者よ、わたしは罪とは決別したが、分別とは決別していないということを教えてやろう。奴隷は所有し続けて、天国にも行つてやる」と言っているかのようにわたしはこれまで考えてきた。

ひょっとすると、彼の最近の回心にあまり期待しすぎではらないということをおぼろげに知らしめるために、彼はその不当な要求をさらに厳格で過酷にしたのかもしれない。この人物には善なる本性がいつでも欠乏していたが、いまや彼の容貌すべてが敬虔さの見かけのために不機嫌さを帯びるようになった。したがって、宗教は、彼に奴隷を解放させることにも、奴隷をより慈愛の念をもって扱うようにさせることにもならなかった。仮に宗教が彼の性格になんらかの影響を与えたとしたら、それは彼を彼なりのやり方でもっと無慈悲で忌々しい存在にした。宗教を信じるという告白によって、彼の心の生まれつきの邪悪さは除去さ

15 『メソジスト監督教会の教義と規律』（一八三二年）からの引用。

れたのではなく、強化されただけであつた。わたしは彼のことを厳しく裁いているのだろうか？めつそうもない。事實は事實なのだ。オールド船長はこれ以上ないほど敬虔さを装っていた。彼の家は文字どおり、祈りの家であつた。朝にも夕にも、そこでは大きな声で祈りと聖歌が聞こえ、それに彼自身と彼の妻どちらも参加していた。だが、粉挽場から以前よりも多くの食料が運ばれてくることはなかつたし、台所の道徳的福利厚生に對してより多くの注意が払われるということもなかつた。主人トマスが野外集會場で、説教師の演壇の向かいにある小さな囲いに入っていく前よりも、彼の心が少しでも善良になつたとわたしたちに感じさせてくれるようなことはなにもなされなかつたのだ。

(教會規律に基づく) わたしたちの希望はすぐに消え失せた。というのも、上層部の連中はすぐに彼を教會に引き入れ、そして試用期間が終わるまでに、彼が分會を率いているという知らせが聞こえてきたのだ！彼は信徒連のなかで非常に注目され、すぐさま平信徒説教者となつた。彼の昇進は寓話のジャックの豆の木の成長とほぼ同じくらい急速であつた。信仰復興集會において彼以上に精力的な人物はいなかつた。集會を開催し、外部の人々を宗教に関心をもたせる手助けをするために、彼は何マイルも移動することをいとわなかつた。彼の家はセント・マイケルズで最も幸福ではないにしても、最も神聖な家のひとつだったので、「説教師たちの家」になつた。これら説教師たちは明らかに、主人トマスの歓待に与ることを好んでいた。というのも、彼はわたしたちを飢えさせたが、彼らの腹は満たしたからである。一回の機會につき、これら福音の使徒たち——奴隸制によれば——の三、四人

がそこにいて、全員がこの国の最上の産物を食べていたが、台所にいるわたしたちはほとんど餓死しかけていた¹⁶。わたしたちがこうした神聖な人々から挨拶がてらの笑みを投げかけられることは頻繁にはなかつた。彼らは、わたしたちが奴隸制から解放されることについて無関心であるのと同じくらい、わたしたちが天国に行くことについても無関心なようにみえた。この全般的な非難にはひとつ例外があつた——ジョージ・クックマン尊師である¹⁷。ストークス師、ユーリー師、ヒッキー師、ハンフリー師、クーパー師(全員セント・マイケルズの巡回教区に所属していた)とは違い、彼は親切にもわたしたちの現世的、精神的な福利厚生に関心を払ってくれた¹⁸。彼の目から見ると、わたしたちの魂とわたしたちの体はすべて等しく神聖であつたのであり、彼はその植民地化についての考えと混ざり合つたかたちで、眞の反奴隸制感情をおおいに抱いていた。わたしたちの近隣でクックマ

16 創世記45:18

17 イギリス生まれのジョージ・クックマン(一八〇〇—一八四一年)は父親が経営する商社で働いていたが、仕事でアメリカに滞在したことをきっかけにアメリカで布教活動を行うことを決意した。一八二五年にアメリカに移住し、メソジスト派の説教師としてペンシルベニア州、ニュージャージー州、メリーランド州、ワシントンD・Cの各地で説教を行った。彼がセント・マイケルズ・メソジスト監督教會の牧師となつたのは一八二九年夏のこと、それ以来少なくとも一八三〇年台初頭まではその地位にとどまっていた。

18 リーヴァイ・ストークス、ウィリアム・ユーリー(一八一〇頃—一八八〇年)、ウィリアム(もしくはトマス)・ヒッキー、ジョシユア・ハンフリーズ(一八〇一頃—一八七九年)、イグネイシャス・テイラー・クーパー(一八〇六—没年不詳)はいずれもこの時期にメソジスト教會の巡回説教師として、セント・マイケルズを含む周辺地域で説教を行っていた。

ン氏を愛し、ほとんど崇めたてるまでにならない奴隷はひとりとしていなかった。この近隣の最大の奴隷所有者のひとり——サミュエル・ハリソン氏——に彼がもつ奴隷全員を解放させる上で、クックマン氏が主要な役割を担っていたと非常に広く信じられていた¹⁹。そして実のところ、一般的な所感では、クックマン氏は奴隷所有者に会うたびに誠実に彼らに働きかけ、彼らが自らの奴隷を解放するように促していたと、そして彼はこれを宗教的な義務として行なっていたと考えられていた。この善良な人物がわたしたちの家にいるとき、わたしたちは全員かならず朝の祈りに呼ばれ、彼はわたしたちの精神状態について進んで質問をしては、忠告と励ましの言葉をくれるのであった。この福音の誠実な説教師がトールボット郡巡回教区から外されたときの奴隷全員の悲しみは大きかった。彼は雄弁な説教師であり、メーソン・ディクソン線の南ではほとんどの牧師がもっていない、もしくはあえてみせようとはしないもの、すなわち温厚な博愛の精神をもっていた²⁰。わたしが話しているこのクックマン氏はイギリス人として生まれ、不運な大統領号に乗船してイギリスへ渡航中に亡くなった²¹。メリーランドの数千の奴隷たちが、その慰安の言葉に

19 サミュエル・ハリソン（生年不詳―一八三七年）はトールボット郡で最も富裕な奴隷所有者のひとりで、一八三〇年には八十四名の奴隷を所有していた。友人であり相談相手でもあったクックマン師に説得されて、自分が死んだら成人男性の奴隷全員を解放すると遺書に明記した。
20 メーソン・ディクソン線はペンシルベニア州とメリーランド州の境界線で、当時の自由州と奴隷州の境界となっていた。この名称は、一七六〇年代にこの境界を測量し画定したふたりのイギリス人、チャールズ・メーソンとジレマイア・ディクソンにちなむ。

非常に多くを負っているこの善良な人物の運命を知ることができるとしたら、彼らの大好きな説教師、友人、恩人をしのんで、わたしがこのページに一粒の涙を落としたことを彼らは感謝するであろう。

だが、主人トマスと彼の回心後のわたしの経験の話に戻ろう。

ボルチモアではときどき、自由市民の子供たちにまじって日曜学校に参加し、一緒に授業を受けることができた。ただし、読み書きを習得してからは、わたしはそこでも生徒というよりは先生に近かった。しかし東岸に戻って主人トマスの家にいるようになると、教えることも教えられることも許されなかった。この地域全体が——白人のなかではただひとりの例外を除いて——奴隷や自由黒人に教育を施すようなことすべてに対して難色を示した。その唯一の例外であったウィルソンという名の敬虔な若者は、ある日わたしに、セント・マイケルズのジェイムズ・ミッチェルという名の自由黒人の家で、ちょっとした日曜学校で教えるのを手伝ってくれないかと訊いてきた²²。この考えはわたしにとって喜

21 クックマンは一八三九年には合衆国議会付きの牧師に任命され、さらに一八四一年三月には、就任して間もないウィリアム・ハリソン大統領からの特使としてイギリスに文書を届ける任務を担うが、乗っていた蒸気船「大統領号」が嵐に襲われて沈没してしまい、他の百名ほどの乗客とともに帰らぬ人となった。

22 トールボット郡の東のキャロライン郡デントン近郊にネイサン・ウィルソン（一七九七年頃―一八六一年頃）という名のクエーカー教徒がおり、一八四〇年代初めに白人向けの学校を開いていたことが知られているが、年齢から考えて別のウィルソンを指しているのかもしれない。ジェイムズ・ミッチェル（一八〇九―一〇〇〇没年不詳）は、ダグラスの姉イライザ・ベイリーの夫ビクター・ミッチェルの兄弟であった自由黒人。

ばしいものだったので、わたしは快く、できるかぎりの休息日をこの立派極まりない仕事に捧げたいと彼に言った。ウィルソン氏はすぐに一ダースの古い綴り字練習帳と数冊の聖書をかき集めてきた。それでわたしたちは二十名ほどの生徒とともに、自分たちの日曜学校の運営を開始した。ここにはわたしが生きるに値するなにかがあると、わたしは思っていた。ここには人の役に立つための素晴らしい機会があり、自分が永遠に離別してしまったときのようなときには思えたボルチモアの友人たちのうちの何名かのような若い友人仲間、知識を愛する仲間をすぐに得られるのだと。

わたしたちの最初の日曜学校は楽しくすぎ、わたしはそれに続く週を愉快にすごした。ボルチモアに行くことはできないが、ここでちょっとしたボルチモアを作ることができるのだ。二回目の集まりで、日曜学校に反対する意見がでていることを知った。そして果たせるかな、わたしたちが仕事——数名の黒人の子供に神の子キリストの福音の読み方を教えるというだけのよき仕事——を始めるやいなや、ライト・フェアバンクス氏とギャリソン・ウェスト氏——分会長のふたり——と主人トマスに率いられた暴徒が押し入ってきた²³。殴り棒や飛び道具で武装した彼らは、わたしたちを追い払い、このような目的で二度と集まるなど命令した。この敬虔な一団のなかのひとりがわたしに、お前は次のナット・ターナーになるつもりだな、気をつけないと、ナットがく

23 ライトソン・フェアバンクスもしくはフェアバンクス（一八〇六年頃（没年不詳）とギャレットソン・ウェスト（一八〇〇～一八五三年）はいずれも、セント・マイケルズのメソジスト監督教会の熱心な信徒で、後者は一八二九年から一八三六年にかけて同教会の評議員を務めていた。

らったのと同じくらいたくさん弾丸をくらうことになるぞと言った²⁴。セント・マイケルズの町で誕生したての日曜学校はこうして終わった。神への献身を公言しているこれから分会長たちによってわが日曜学校が解散させられたことは、わたしの宗教的確信を強めるのに役立たなかったと述べても読者は驚かないであろう。わがセント・マイケルズの家の上にたちこめる暗雲はこれま

で以上に重く、黒くなったのだ。

南部の宗教には人々をより賢くあるいは善良にする力があるというわたしの確信が揺らいだのは、主人トマスが中心となって日曜学校を解散させぶち壊したためだけではなかった。彼のなかに、彼が宗教を信じると告白する前にみせていたすべての無慈悲さとさもしさを、彼の回心のあとにも、見いだしたためでもあった。彼の無慈悲さとさもしさは、わたしの不幸なひとへ二に對する彼の扱いに特にあらわれた。彼女はその体の不自由さゆえに、彼にとつて重荷となっていた。わたし自身では、彼を告発するような顕著にひどい個人的扱いを受けてはいないが、彼がこの不自由で障害のある女性をしばりあげ、非常に残忍で衝撃的なやり方で鞭打つのは見たことがある。そのようにしてから、実に血も凍る冒涇であるが、彼は聖書の一節、「主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる」を引用するのだった²⁵。主人は、この傷だらけの女性の手首を小梁の締め釘にしばり上げて、いつときに三、

24 実際にはナット・ターナーは銃弾を受けて死んだという事実はなく、反乱後二ヶ月以上も潜伏したあとに確保されて絞首刑に処された。

25 ルカによる福音書12:47

四、五時間もそのままにしておくのだった。彼女を朝にしばらく上げ、朝食前に牛革の鞭で鞭打ち、彼女をしばらく上げたまま自分の店に行き、昼食に戻ってくると折檻を再開し、繰り返された鞭打ちですでに皮膚がむけている肉にごつごつした鞭を振るうのだ。

彼はこの哀れな少女をこの世から葬り去ろう、あるいはいずれにせよ、厄介払いしようとしているようにみえた。その証拠に、彼はのちに彼女を自分の妹のサラ（クライン夫人）にあげてしまったのだが、主人ヒューの場合と同じように、すぐにヘニーは彼のところに戻されてきた²⁶。最終的には、自分には彼女をもういかんともしようがないという口実で、主人は（彼自身の言葉を使うと）「自分で自分の面倒をみるようにあの娘を外に出してやった」。これがつい最近回心した男のやることであつた。老主人から相続した体格のよい五体満足の奴隷たち——自由な身分であれば、自分自身の面倒をみることはできたであろう人たち——はしっかりとつかんで離さないが、体が不自由な唯一の者を放り出し、事実上餓え死にさせたのだ。

もし主人トマスが北部の敬虔な信徒仲間から、なぜあなたは自分が保有する者たちに対して奴隷所有者の関係を維持しているのですかと尋ねられることがあつたとしたら、彼の返答は、他の多くの奴隷所有者たちがその問いに対して返してきた返答とまったく同じであつただろうことは間違いない。すなわち、「わたしは奴隷たち自身のために奴隷を保有している」という返答だ。

26 サラ・オールド・クライン（一八一―没年不詳）は、トマス・オールドの両親の五番目の娘。

主人トマスと一緒の暮らしでのわたしの状況は悪かったが、はるかにもっと追い立てられた過酷な生活をすぐに経験するはめになった。主人トマスとはどんな人物なのかについて、わたしはつきり見透かしていたため、また、彼の気まぐれな小言に対して、わたしが果敢に自己弁護してみせたため、わたしと主人とのあいだには多くの不和が生じ、ついには彼がわたしを彼の要求に沿わないと宣言したのだ。彼によれば、都市での生活はわたしに悪影響を与え、実のところ、わたしを墮落させてあらゆるよい目的に適わなくさせてしまい、あらゆる悪いことに合うようにさせてしまったとのことだった。わたしの最大の失態あるいは罪のひとつは、彼の馬を逃がしてしまい、彼の義理の父が所有する農場まで行かせてしまったことであつた。この動物はその農場が好きであつたが、これにはわたしも完全に同感であつた。わたしがこの馬を放すといつも、馬はあたかもたいそうなお祭り騒ぎに興じているかのように、ハミルトン氏の農場まで道を突っ走っていくのだった。馬がいなくなれば、当然それを追いかけてはならない。この場所に対するわたしたちの相互の愛着は同じ理由による。馬はそこでよい牧草にありつくことができたし、わたしはそこでたくさんパンにありつくことができた。ハミルトン氏には彼なりの欠点もあつたが、自分の奴隷を飢えさせることはそのひとつではなかった。彼は食料を豊富に与え、しかもその質が優れていた。ハミルトン氏の料理人——メアリーおばさん——は、わたしの非常に寛大で思いやり深い友人となってくれた。わたしがそこに行けばかならず、彼女は一、二日分の欠乏を埋め合わせるのに十分なパンをくれるのだった。ついに主人トマスは、わたし

のふるまいをもう容赦しないと決めた。わたしたちがあまりに彼の義父の農場に行きたがるので、彼はわたしも馬も置いておけなくなったのだ。わたしはこのときまでには彼と九ヶ月近く同居し、彼はわたしに数多くの鞭打ちを加えてきたが、わたしの性格やふるまいに明らかな改善がみられなかったので、わたしを外に出して——彼が言うように——「調教してもらう」ことを決めたのだ。

わが主人が宗教の洗礼を受けたベイサイドの野外集会場のすぐ近くに、エドワード・コヴィという名の男がいて、若い黒人の調教にかけては第一級の人物だという忌むべき評判を得ていた。このコヴィは貧しい男で、農場の借地人だったので、この評判（奴隷たちとすべての善良な人々にとっては憎むべきものであったが）は同時に彼にとつてたいへんな強みとなっていた。この非常に顕著な評判のおかげで、それがなければかかっていただであろう費用に比べて、非常に少ない費用で農場を耕すことができたのだ。奴隷所有者のなかには、自分の奴隷をほとんど無料で一、二年間、コヴィ氏の管理に委ねるのがよいと考える者もあり、その理由は、そうした奴隷たちが彼の管理下で素晴らしい訓練を受けるからであった！腕前が知られていて、料金を支払うことなく地域で最高の馬に乗る馬の調教師のように、コヴィ氏は、近隣の最も気性が激しい者たちをよく調教して、その所有者に戻すという単なる返礼のゆえに、そうした者たちを自分のものに抱えることができた。この仕事の義務へのコヴィ氏の生まれつきの適性に加えて、彼は「宗教心をもっている」と言われ、その農場の耕作にカネアツトレンおけるのと同じように、敬虔さの涵養カネアツトレンにおいても厳格であった。

わたしは、彼の管理下にあった何名かから彼の性格について聞いており、彼のところに行くことを楽しみにしてはできない一方で、セント・マイケルズから離れることはうれしかった。他の点では苦しむとしても、コヴィのところでは十分な食べ物を得られることを確信していた。これは、飢えた者にとつては、無関心でいられるような見通しではないのだ。